例会記事

十月例会　昭和六十三年十月二十二日（土）
順天堂大学医学部九号館一番教室

一　資料紹介「盤水尺素」　吉田　厚子
二　『明治期における脚気の歴史』をめぐる話題　山下　政三
三　ビデオ鑑賞―安政四年のヒポクラテスたち―（六〇分）

十一月例会　昭和六十三年十一月二十六日（土）
順天堂大学医学部九号館一番教室

一　『エピデミアイ』諸篇に見るヒポクラテス医学派の歴史的実像―その思想上の位置づけを含めて―　今井　正浩
二　ビデオ鑑賞―医跡めぐり―『帝王切開術発祥の地』（一〇分）
三　池田多仲　深瀬　泰旦

十二月例会　昭和六十三年十二月十七日（土）
順天堂大学医学部九号館一番教室
（蘭学資料研究会と合同で行われた）

一　瘡守稲荷信仰と梅毒史　中西　淳朗
二　十九世紀江戸でのエウスタキ解剖書　菅野　陽
三　村尾留器の『三省録』について　岩崎　鐵志
四　ビデオ鑑賞―医跡めぐり―『緒方洪庵と適塾』（一二分）

例会抄録

『米利堅平本常用方』について

高安伸子・酒井シヅ

ヘボン（James Curtis Hepburn）は宣教医師として安政六年に来日した。しかし一般的には神学等の業績が評価され、医師としてのヘボンについてはあまり顧みられていないと言える。その原因の一つとして、ヘボンの行った医療活動の、第一次史料不足が挙げられる。今回演者らは、岐阜県羽島の内藤記念くすり博物館所蔵の『米利堅平本常用方』の記述に、明治三年陰暦七月十二日からの横浜においての日誌が含まれていることに気付いた。『米利堅平本常用方』は文章の表記から写本であると思われるが、原本の筆者等の記載が残されていないため詳細は不明である。しかし、少なくとも日誌部分の原本の筆者はヘボン自らではなくヘボン施療所にいた門弟の誰かであろうと推測される。本史料は日誌部分と常用方部分の二部構成となっていた。今回は日誌部分のみを取り上げて、ヘボン施療所での医療活動がどのようなものであったかを分析・考察したが、今回の報告は概略の報告であることを初めにお断りしておく。

考察の結果、ヘボンが非常に積極的に日本人に対して施療活動を行っていたことが判明した。ヘボンのみならず、シモンズ（D.B. Simmons）がこの施療所でかなりの人数の患者を診療して